



アドルフ・ローゼンベルク [著]  
エードゥアルト・ハイク [文]  
マックス・ティルケ [画]  
飯塚信雄 [監修]  
高橋吉文・土合文夫 [訳]

# 服装の歴史

図説

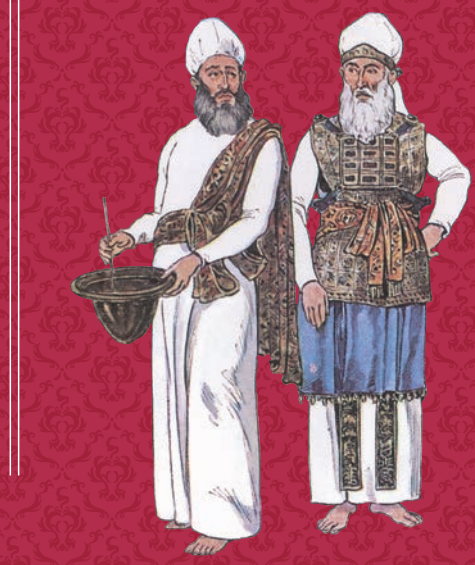
世界の服装の歴史と民族衣装を  
400頁に及ぶ美麗な図版と  
詳細な解説で網羅した古典的名著が  
ハンディーな縮刷版となって新登場！

〔普及版〕

全2巻

国書刊行会  
2022年  
6月発売

Geschichte des Kostüms



## 本書の特徴

- 服装史の古典的名著の本邦初の全訳として好評を博した初版を、ハンディーなサイズにした縮刷普及版。
- 原著 (*Geschichte des Kostüms*, 1905-1923) は、美術史家ローゼンベルクが蒐集した膨大な資料に基づき構想され、ドイツ文化史家・歴史家であるハイクが解説文を書き、服飾画家マックス・ティルケが素描を担当。刊行開始から完成まで18年の歳月をかけた大著である。
- 400頁に及ぶ図版の多くは、手書きの彩色画である。編年体的配列を基本とし、全体を展望する図版と解説を提示したのち、より細かい期間や地域における服飾の特徴や変化を図説。世界の服装の歴史を、民族衣装まで含めて、圧倒的な視覚資料によって網羅する。
- 邦訳版では、原著の改訂版(ドイツ語版、英語版)でなされた補足や修正等を反映。さらに、服飾用語や歴史的背景、人物、語源等に関し、訳注を大幅補筆し、服飾の初心者や専門外の読者にも参照しやすいつくりとした。
- 邦訳版では、どの地域の民族衣装かを把握する一助として、新たに民族衣装関連地図を制作。さらに下巻には、事項索引(附録・項目別服飾事項一覧)および人名索引を付して読者の便に供した。
- 総合的学習や調べ学習のための、あるいは歴史小説・コミック等の背景理解、イラスト等の制作のための参考書としても有用である。

## おすすめします

- ◆ 高等学校・中学校図書館
- ◆ 大学図書館、文学部等の学部図書館
- ◆ 公共図書館
- ◆ 服飾デザイナー、服飾系の専門学校 など
- ◆ イラストレーター、美術系の専門学校 など
- ◆ 小説家、ゲームクリエイター ほか

(外商の方々へ)  
本書は分売不可だった初版(全2巻、ISBN 978-4-336-04086-2)と異なり、上下巻ごとの分売が可能です。ハンディーサイズの廉価版のため、初版時に購入が難しかった諸機関に向けて、あるいはすでに購入済みの大学・公共図書館等でも、学部図書館や図書館分館での副本購入に向けて、販売促進をいただけますと幸いです。

## 図説 服装の歴史〔普及版〕全2巻

B5変型判(257×188ミリ) 上巻=559ページ/下巻=477ページ 上製・かがりPUR製本・カバー装  
定価: 上巻=本体18,000円+税 / 下巻=本体17,000円+税 刊行予定日: 2022年6月25日  
ISBN: 上巻=978-4-336-07349-5 / 下巻=978-4-336-07350-1

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15  
電話: 03-5970-7421 ファックス: 03-5970-7427  
https://www.kokusho.co.jp E-mail: info@kokusho.co.jp

取扱店

## 注文票

ご記入後、お近くの書店へお持ちください。

『図説 服装の歴史』〔普及版〕上巻を 冊注文します。

『図説 服装の歴史』〔普及版〕下巻を 冊注文します。

ご住所

お名前

電話番号

## 普及版刊行にあたって 万華鏡的な衣装図を誇る服装史の金字塔

高橋吉文(訳者代表、北海道大学名誉教授)

服装史とは、人類の各文明、各文化において着用された多様な衣装を(復元)し、一定の視点からそれらのすべてを一望のもとに展覧させていこうとするものである。だが、いかなる衣装も時間という無常の風にさらされて姿を消していく。とはいえ、歴史上失われた衣装群を(復元)しなければ服装史は成立しえない。それらを可視化して蘇らせてみせる魔法の杖がイラストである。服装史は、①歴史的衣装を時間軸に沿って配列し、民族衣装を周縁に空間的に配置して総覧しようとする強い統合意志(遠近法)と、②考古学にも似た科学的実証的な探求姿勢の成熟、そして③イラストへの強い信頼の三者がそろい踏みした19世紀の末から20世紀初頭の「世紀転換期」に、黄金期を迎える。フランスのラシネ著の服装史、それを範としたドイツのローゼンベルクの本服装史、この二書が大服装史における二大双璧をなす。だが、ローゼンベルクの服装史の場合、③は「イラストが放射するオーラへの陶醉」というべきかもしれない。日本の開国前後の時期、東洋の日本からもたらされた北斎等の浮世絵等が西洋にひき起こした凄まじい激震、「ジャポニスム(日本趣味、日本の感性)」という強烈な視覚革命が放射するオーラに導かれて、西洋の視覚や思考は、三次元を志向する遠近法から二次元「平面性」へのパラダイム・シフトを強いられていた。全体性・統一性を是とする遠近法をジャポニスムは失効させ、画家たちをその不毛な縛りから解放し、絵画というものは、今や何をどのように描き、いかように編集してもよいものだとする「平面性」の秘儀を啓示したためである。本書のマックス・ティルケ描く人物たちのイラストにも、その影響を感じ取ることができる。

例えば、その秘儀の要のひとつに断片性を十全と見る感覚がある。白い無の「平面」において美術に高下なく、正統美術から軽侮されていたロートレックの商業ポスターであれ、雑誌の挿絵、絵本、漫画、衣装画等のイラストであれ、描かれるべき意義が十全にあり、また群像から切り取られた人物像も、その断片のまま独自の位置を柔軟に与えられる。中心なき無の「平面性」では中樞も辺境も水平化され、そこにおいて優劣等は基本的にありえないからである。

本書『図説 服装の歴史』は、服装史の条件である遠近法の黄昏時に、ジャポニスムの洗礼もまた混淆して誕生したテキストとイラストのコラボである。1) まず図版が示され、2) その歴史上の独自性が概略的に解説される。その上で、3) その時代地域における服装の特徴や由来等が詳説され、最後に4) 図版の各人物たちの衣装に関するコンパクトなコメント(キャプション)が列挙される。読者を導く導線が全体から細部へと四段構えて敷設されているのである。それに5) 日本語版オリジナルとなる訳注がキャプション内に膨大に追記され、これまた日本語版オリジナルとなる6) 各種地図、7) 巻末の三種類の索引、8) 巻頭の緒言三種、巻末の服装史考二種も付帯されている。その意味で本書は、日本語に全訳された日本で唯一の服装史であると同時に、原著と日本語版オリジナルとによるコラボの結実でもある。

とはいえ、本書における最大の魅力は、400頁にも及ぶ美麗なる服装の図版(プレート)群であろうか。ティルケをメイン・イラストレーターとする衣装図の万華鏡的光景をまのあたりにする時、イラストこそがやはり服装史の命であること、古の衣装の(復元)にはイラストの魔法に如くものないことを強く実感させられる。それは、未だ異端であったイラストが、社会の主役に躍り出ようとする雌伏期にあげられた狼煙でもあった。

## 著訳者略歴

原著	訳者
[著] アドルフ・ローゼンベルク Adolf Rosenberg 1850-1906. 美術批評家。旧ブロンベルク(現在ポーランド領のブイドゴシュチュ)生まれ。ベルリン大学で古典文献学と考古学を学び、ベルリンの中心的な美術批評誌「造形美術誌」の付録「美術アーカイヴ」の専属寄稿者、日刊紙「郵便」の文芸欄編集長などを務める。「ラファエロ」、「ルーベンス」等の評伝から、「近代美術史」、「美術史便覧」などの総覧的な著述まで著作多数。	[監修] 飯塚信雄 イヅカ ノブオ 明治大学名誉教授。西洋生活文化史・服装史。
[文] エードゥアルト・ハイク Eduard Heyck 1862-1941. 歴史家、作家、詩人。ドイツ最北端の港町バート・ドベラーン生まれ。ライプツィヒ、ハイデルベルク等の大学で比較言語学や歴史学、美術史を学び、フライブルク大学講師やハイデルベルク大学員外教授を経たのち、フェルステンベルク図書館長などを歴任。「ドイツ史」、「ヒスマルク」など著作多数。	[訳] 高橋吉文 タカハシ ヨシフミ 北海道大学教授。ドイツ文化史と口承文芸。
[画] マックス・ティルケ Max Tilke 1869-1942. 装飾画家。1912年、ロシア皇帝からの招きでグルジア(現ジョージア)のティフリス(現トビリシ市)に赴き、コーカサス(カフカース)美術館に収められる大規模な民族衣装のコレクションを設営。のちには、ベルリンのリップパーハイデ服装図書館や、ベルリン・ダーレムの国立民族学博物館などで活躍。「オリエント衣装の裁断と色彩」、「東ヨーロッパ民族衣装の裁断と色彩」などの著作がある。	[訳] 土合文夫 ドアイ フミオ 東京女子大学教授。ドイツ・オーストリア文学。 ※肩書は初版刊行当時



上巻

監修者のはしがき(飯塚信雄)  
緒言(高橋吉文)  
普及版刊行にあたって(高橋吉文)

I 古代オリエントと古代エジプト

- 1 人類の初期
- 2 エジプト 古王国と中王国の時代
- 3 古代エジプト 古王国と中王国
- 4 古代エジプト 新王国、紀元前1600年頃以降
- 5 古代エジプト ラムセス王朝時代の戦士たちの衣装
- 6 古代エジプト ラムセス王朝時代
- 7 古代エジプト 新王国
- 8 古代エジプト 新王国
- 9 西アジアとエチオピア人 古代
- 10 古代エジプトの家具
- 11 エジプトの楽器
- 12 アッシリア
- 13 アッシリア
- 14 アッシリア
- 15 ヘブライ人
- 16 西アジア 古代
- 17 西アジア 古代
- 18 ベルシアン人 古代
- 19 インド 古代
- 20 インドシナ半島
- 21 スキタイ人と小アジア人

II 古代ギリシアと古代ローマ

III 中世

IV 16世紀

- 121 ドイツ 16世紀最初の25年間
- 122 ドイツとネーデルラント タビストリー(壁掛け絨毯) 16世紀最初の25年間
- 123 フランドル地方 16世紀最初の25年間
- 124 ドイツ 16世紀最初の25年間
- 125 ドイツ 1500年-1550年
- 126 騎士の軍装 1550年-1575年
- 127 ドイツ 16世紀前半
- 128 ドイツ 1575年-1600年
- 129 ドイツ 職人たち 16世紀最後の25年間
- 130 ドイツ 16世紀前半
- 131 ネーデルラント 居酒屋の内部 1525年-1550年頃
- 132 ドイツ 1575年頃の女性の衣装
- 133 ドイツ 傭兵 1500年-1540年
- 134 ドイツ 傭兵 1520年-1550年
- 135 ドイツ 傭兵 1540年頃
- 136 ヨーロッパ 戦闘服 16世紀の終わり
- 137 ドイツ 16世紀後半
- 138 フランス 1485年-1510年
- 139 フランス 1500年-1560年
- 140 フランス 1560年-1575年
- 141 フランス 軍人と民衆の諸タイプ 1560年-1590年

- 142 フランス 1575年-1590年
- 143 フランス 1575年-1600年
- 144 発見当時のメキシコ 16世紀最初の25年間
- 145 発見当時のメキシコ 16世紀最初の25年間
- 146 スペインとポルトガル 1500年-1540年
- 147 南アメリカ インカ帝国 15世紀と16世紀(1535年まで)
- 148 スペインのムーア人 15世紀
- 149 中央アメリカ スペイン人による発見当時とそれ以前
- 150 スペイン 1525年-1600年
- 151-152 イタリア 1500年頃
- 153 イタリア 1550年-1575年
- 154 イタリア 1535年-1575年
- 155 イタリア 16世紀
- 156 イタリア ヴェネツィア ヴェネツィア総督の衣装とその側近たち
- 157 イタリア 16世紀最後の数十年間
- 158 イギリス 1536年-1539年
- 159 イギリス 1536年-1539年
- 160 イギリス 1600年頃
- 161 グレートブリテン(英国) 16世紀中葉以降
- 162 ネーデルラント南部 16世紀前半
- 163 ネーデルラント南部 16世紀後半
- 164 ドイツ 学者の書齋 1500年頃
- 165 ドイツ 1500年-1550年
- 166 ドイツ 1550年-1600年
- 167 オリエン特 兜と鎧 15世紀-18世紀
- 168 オリエン特 武器 16世紀-18世紀
- 169 トルコとエジプト 16世紀後半
- 170 トルコ 16世紀後半

V 17世紀

下巻

VI 18世紀と19世紀

VII ヨーロッパの民族衣装

- 301 バイエルン 民族衣装
- 302 バイエルン 民族衣装 19世紀初頭
- 303 ドイツ バイエルン 19世紀前半
- 304 ヴュルテンベルク 民族衣装
- 305 ヴュルテンベルク 民族衣装
- 306 バーデン 民族衣装
- 307 バーデン 民族衣装
- 308 南西ドイツ 民族衣装 19世紀初め
- 309 バーデン 民族衣装
- 310 エルザスとロートリンゲン 民族衣装
- 311 ヘッセ 民族衣装
- 312 ドイツ西部 民族衣装 19世紀半ば
- 313 ドイツ西部 民族衣装 19世紀半ば
- 314 ヴェストファーレン 民族衣装
- 315 ニューザクセン 民族衣装
- 316 ドイツ シュレースヴィヒ=ホルシュタインとハンブルク 19世紀初頭の民族衣装
- 317 ドイツ ポメルンとリュウゲン島
- 318 東プロイセン 民族衣装

- 319 シレジア 民族衣装
- 320 ザクセンとプロイセン 民族衣装 19世紀初頭頃
- 321 ブラウンシュヴァイク 民族衣装
- 322 ハルツとテューリンゲン 民族衣装
- 323 ハンブルクとその周辺 民族衣装 19世紀初頭
- 324 北フリースラント諸島 民族衣装
- 325 オランダ 民族衣装
- 326 オランダとベルギー 民族衣装
- 327 ベルギー 民族衣装
- 328 イギリス 民族衣装 19世紀前半
- 329 スコットランド 民族衣装 18世紀後半から19世紀半ばにかけて
- 330 フランス 民族衣装
- 331 フランス 民族衣装
- 332 フランス 民族衣装 1820年代から40年代
- 333 地中海および大西洋の島嶼部 民族衣装
- 334 バルカン半島
- 335 バルカン半島 民族衣装 19世紀後半
- 336 ギリシアとバルカン 民族衣装
- 337 バルカン半島 民族衣装 19世紀から現在
- 338 ハンガリー 民族衣装
- 339 ハンガリー 民族衣装
- 340 ハンガリー 民族衣装 19世紀前半
- 341 ボヘミア(チェコ) 民族衣装
- 342 南東ヨーロッパ 民族衣装
- 343 オーストリア・アルプス 民族衣装 1800年頃(ティロール)
- 344 オーストリア 民族衣装 19世紀と現代
- 345 オーストリア 民族衣装
- 346 ロシア 民族衣装
- 347 ロシア 民族衣装 19世紀
- 348 カフカース地方中部 民族衣装
- 349 南スラヴとルーマニア 民族衣装 近代
- 350 スウェーデン 民族衣装
- 351 デンマーク 民族衣装
- 352 ノルウェー 民族衣装
- 353 スペイン 民族衣装 1810年-1830年
- 354 スペイン 民族衣装 14世紀中葉
- 355 スペイン 民族衣装 19世紀前半
- 356 スペイン 闘牛 近代
- 357 ポルトガル 民族衣装
- 358 イタリア 民族衣装
- 359 イタリア 民族衣装 近代
- 360 イタリア 民族衣装 教皇国家と下部イタリア 1830年頃
- 361 イタリア 民族衣装
- 362 スイス 民族衣装 19世紀前半
- 363 スイス 民族衣装
- 364 スイス 民族衣装

VIII アジア、アフリカ、アメリカの民族衣装

収録地図一覧

世紀転換期ドイツの服装史家たち

一本書の解説に代えてー(飯塚信雄)

服装史考(高橋吉文)

訳者あとがき(高橋吉文)

索引(事項・人名)

216 中世

80 ドイツ 15世紀後半



80 ドイツ

15世紀後半

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10

- 上段
- 図1. 図3. 図4. 図5. 1490年頃の最上流階級の服装
- 図2. 王侯の服装
- 下段
- 図6. 1490年頃の貴族
- 図7. 図8. 1430年頃の騎士階級の若者
- 図9. 1500年頃の料理人
- 図10. 1490年頃の農婦

かつて帝国議会が開かれたドイツ・ハルツ地方の都市ゴスラーにある市役所の忠誠の間には、画家デューラーの師であるニユルベルク人ミヒャエル・ヴォールゲムート(1433/34-1519)の手になるとされる15世紀末の壁画がある。異なる考え方を結合させるという当時よくみうけられたアナクロニズムにしたいが、その壁画の一部は、古代ローマ皇帝と古典古代の巫女シビュラたちを描きだしている。もちろん、人々がいまだ予感だにしない考古学的・科学的なとらえ方に拠って描くのではなく、自分たちの生きている皇帝マクシミリアーン時代がいだいていた美しいイメージに徹底的に基づいて画中の男女たちに衣装をまとうせる、といったやり方によっていた。

1400年頃ないしはドイツ15世紀末の最上流社会の服装をみごとに図示したこうした絵画は、服装史の史料として好んで、かつ頻繁に用いられてきたものである。ただし、その「皇帝」と称されたものの頭部や権標は、これよりも前の時期からすでに他の確かな手本にもとづいてかなり自由に描きかえられていたものであった。これは、恣意的な処理とは正反対のものでさえあった。というのも、画家たちはその逆に、あるお決まりのパターンに従って、当時の身分の高い者たちをひたすら皇帝像につくりあげるという恣意を強いられていたからである。しかも、画家自身も、自分は古代史上のローマ皇帝たちをどのようにイメージしているかといった、今の私たちからすればどうでもよいことのみ価値をおいていたのである。したがって、こうして描かれたローマ皇帝図を、逆にその絵のモデルとなっていた当時のドイツの権力者たちの顔へともどす操作は、

きわめて理にかなったものであった。さて、しかし、ここでは時代順に、別のソース(原画)に依拠した15世紀中葉にまで遡る図版中の図7と図8について、まず述べることにしよう。

図7. 図8. この2人の若い男性たちは、多目的に使われる短剣かないしは太古以来の短剣ともいえる腰刀のほかには佩用している騎士用の剣から、その身分がわかる。図7の男性は、トラップルト Trappert と呼ばれる、結局のところ以前のチュニククの再来にすぎない外衣(幅広で装の多いガウン)を着用している。これは、元来はタッペルト Tappert と記したもので、より古い形はフランス語のタバール tabard(陣羽織)、中世ラテン語の tabardum に由来するタファールト Taphart であった。(訳注: 図版94参照。ちなみに、ドイツ・レクラム社の『モード・服装事典』(1987)に拠れば、この語はケルト語に由来するという。)この緑のトラップルトには、動物の毛皮が縫いつけられていて、下がダッキング(緑を鋸歯状にする切り込み装飾)になっているが、しかし、中世後期の目立ちたがり屋たちの感性が、しばしばダッキングで見せたあの度を越した大胆さは、ここには見られない。

図8は、真正正銘の伊達男。首を露出しているが、これは15世紀では男性においてもよく見られたことだった。下腕部をむきだしにするのも同様で、これまた伊達男たちお気に入りのファッションであった。右袖から、內衣のシャツ(アンダー・チュニク)がのぞいている上着ジャーキン(ジャケット)は、ベルトのところまで前身頃が開けられているため、丈のない胸当てが前の開き部分の下部にとりつけられ、さらにジャーキンの片面には、「左右違い」の脚衣に用いられていた斑点の色が使用されている。留め金で固定されるマントの丈は、かなり短くなってしまった。

図1. 図4. 図6. ここに見られるのは、外衣として着用するシャウベ Schaubе(毛皮の襟のついた男性用の丈長の外衣)である。Schaube という語はアラビア語源で(gubba「外衣として着る長袖つき寛衣」)、十字軍以降イタリア語のジュッパ guippa、フランス語のジュープ jupe といった言語変遷の道をたどって、ドイツにやってきたものである。普段着用の短い外衣ヨッペ Joppe は、同じ語源のものが違った単語になったものである。(訳注: 中世低地ドイツ語では sube、後期中世高地ドイツ語では schoube.)

シャウベの特徴は、前がきれいに開いたそのゆるやかな形態にある。そのため、内側に着たり、華麗に装飾をほどこしたり手を入れたりするのはびったりで、

国書刊行会の服飾関連書 中国服飾史図鑑 全4巻

石器時代から20世紀まで2万年に迫る中国服飾の展開を、3000点を超える写真や図解で分かりやすく通観。衣服や冠帽をはじめ、履物や装身具、髪型や化粧まで網羅的に解説するビジュアル決定版!

黄能馥・陳娟娟・黄鋼 編著/  
古田真一 監修・翻訳 / 栗城延江 翻訳  
科学出版社東京 発行  
各巻定価: 本体28,000円+税

